

今日の入学課さん

高橋 章

●大学全入時代突入に向けて

新聞報道を始めとして、大学志願者と入学者数がイコールとなる「大学全入時代」が喧伝されています。大学全入は当初、二〇〇七年度と想定されていましたが、大学志願者の増加があり、もう少し先になりそうです。しかし既に偏差値五〇以下の大学では、合格者より不合格者の方が少ない入試状況は決して珍しくありません。実質倍率(志願者数÷合格者数)の低下および推薦入試での入学者拡大により、全入に近い状況が生じています。また、入学試験(以下、「入試」とする)を取り巻く状況は世間以上に格差拡大、弱肉強食の競争的環境に覆われて

います。極端な話、私立大学はその全てが、入学者の確保に血眼となっているのです。私は、アドミツションセンター入試という入試を取り扱う部課で十一年ほど勤務しております。そんな現状をふまえて、せつなくも可笑しい入試をめぐる入学課の日々を語りたいと思います。

●季節業務から通年業務に

大学のなかで、入学課といいますと読者の皆さんはどんなイメージをもたれるでしょうか?①入試を取り仕切る部課、②大まかにいえば営業担当部課、③入試実施前後は残業が多い部課、④学外の出張が多く全国を巡って楽しそうな部課：といった感じでしょうか。私も他の部課に所属していた際は、正直、そんなイメージがありました。また、入試の際は多忙だが、入試以外の時期は、学外への広報活動(高校訪問や進学相談会の参加など)が中心で入学課のヒトはあまり自席にいないといったイメージもありまし

た。実際、このイメージは異動した十一年前の当初は、差異がありませんでしたが、現在は大部変わりました。入試の多様化、拡大化、複線化により、今や入試は細分化され季節を問わず、実施されています。入試の中心が十一月以降の寒い時期であることは本質的に変わっていませんが、とくに実施時期のしぼりのないAO入試(アドミツション・オフィスによる入試)の導入拡大後、通年化傾向は強まっています。五月、六月からAO入試のエントリー受付が開始され、実質的に入試が始まる大学は例外ではありません。私の勤務する工学院大学でも、今年五月に高等専門学校(高専)卒業見込み者を対象とする「編入学試験」を実施し、七月末から九月初旬には、AO入試のエントリー受付を開始。九月、十月はAO入試の選考を行います。合計すると一年間のうち、その九ヶ月はなんらかの入試、選考を実施しています。まさに入試に追われている状況です。これは多くの大学

でもそう変わらない状況だと思えます。慌しく次から次へと季節を問わず入試を実施していく。入試終了ごとの達成感を感じるものの疲れも取れにくいのが入試課の日々なのです。

●疾走する入学課

入試が無事終わり、他部課の職員、試験監督を務めた教員の方々が家路を急ぐ頃、入学課は活気を呈することとなります。入試が終わったその時点から入学課は疾走を始めるのです。入試が終わると答案の採点です。既に一時限、二時限の試験科目は採点が進んでおりますが、入学課は、答案採点終了まで、ひたすら「待ち」に徹しています。志願者が溢れていた今から十五年前(古株の入学課関係者が集えば、「夢」の日々として語られます)、否、十年前くらいまでは答案枚数が多く、その日では採点を終了できないので翌日に持ち越していました。残念ながら現在は、志願者の減少にともない、

その日のうちに採点が終了できる答案枚数となっております。採点の待ち時間は大部、少なくなりました。ところがその後の時間的余裕がないのです。その原因は、合格発表の早期化です。①競合する他大学に先駆けて合格発表を行い、合格通知を発送する ↓ ②早く合格通知を受け取れば安心して他大学は受験しない ↓ ③入学者が確保できる。こうした思想?に基づき工学院大学では、大半の入試において実施から三日目に合格発表をしています。三日の間には、各学科での審議、学内の合格判定など幾つかのステップが入りますのでかなりタイトなスケジュールです。入試判定に必要な資料作成、チェック、会議の準備のため、徹夜を前提条件とし入学課の業務は行われます。後ろは決まっている。絶対間に合わせなければならぬ。時間との闘いの中で綱渡りの業務が続きます。データの処理は、全てホストコンピュータで行っています。これがまた、一筋縄ではい

きません。テストデータでは正常処理していたプログラムが動かないとか、プリンターの紙詰まりトラブルなど、想定外のトラブルが時折、発生したりします。そんな状況を乗り越え、真冬の白々と明けていく空を眺めながら、ひたすら職務を全うするのも入学課の日々なのです。

●矢面に立つ入学課

試験科目の採点が無事終了し、入試判定に必要な資料も作成。やっと一息といきたいところですが、もうひとつ大きな山場が待っています。合格ラインの策定です。私立大学は、学生納付金が収入の大半を占めています。経営サイド(つまりは法人・理事会)では、安定した経営のためには、なにはさておき、入学定員を確保する必要があります。定員割れなどもつての他というわけです。ところが大学サイドは必ずしも同じ想いではありません。責任をもって学生を受入れ、そして教育していくためには、一定の学力

レベルを保つ必要があるというわけですが。少しでも高いレベルで合格ラインを留めたいと思うわけです。「経営」と「教育」は、時として矛盾し対立していきま。どちらを優先していくべきか悩ましい問題です。両方が上手に収まれば理想的ですが、現実、今年度の入試では、定員割れとなった私立大学は全体の約40%を占めると言われています。こうした厳しい状況では、「経営」優先の合格判定が行われているのが多いと予想されます。笑顔で入学式を迎えることができるか「経営」と「教育」の狭間で合格判定に臨むのも入学課の日々なのです。

●百家争鳴、入試は誰もが語り語れる

誰もが入試を経験しています。ですので、誰もが自らの経験を基にして入試を語る事ができます。入試状況が厳しさを増すと学内では委員会、プロジェクト、○○会議など名称は異なりますが、なんらかの組織が立ち上がり、募集戦略を検

討していくこととなります。検討のなかでは、データを集め、分析し、有効な対応策を定め、実行する。との流れとなるわけですが、これが思うようにはいきません。こと入試に関しては百家争鳴、実に様々な意見があるのです。例えば入試の日程ひとつをとってみてもそうです。競合するライバル大学併願する受験生が多い大学を見据えながら入試の日程を動かしていくか、否、動かさずに様子

をみるか。同じデータを基に検討しても見方、考え方でまったく別の意見が噴出し、喧々諤々となることは決して珍しいことではありません。検討の基となるデータを提供し、最初に分析を行うのは主として入学課です。具体的には事務局の立場で検討に携わっていくこととなります。幾たび立ち上がっては消え、また立ち上がっていく委員会、プロジェクトに疑問を感じながらも一筋の光明を探り当てるべき奮闘していくのも入学課の日々なのです。

●明日の入学課さん

入学式も終わり毎年、五月下旬から六月になると受験産業(予備校など)が前年度の入試状況の分析を発表します。併せて、受験状況から算出された大学難易度(偏差値)もでてきます。競合する大学と比べ志願者が増えた、減った、偏差値が上がった、下がったと喜んだり、落ち込んだりと慌しく日々は過ぎていきます。しかし既に次年度入試に向けた動きは始まっています。全入時代を控え、十八歳人口は前年度から六万人の減少(減少率では過去十年間で最大)、志願者を集める大学、集められない大学の二極化が加速すると予想される状況の中、一筋縄ではいかない入試に振り回されながらの格闘の日々は今日、明日も続いていくのです。

たかはし・あきら

工学院大学

アドミッションセンター入学課